

八思巴字官印集積  
— 『隋唐以来官印集存』の管軍下千戸所印—

吉池孝一

一

羅振玉『隋唐以来官印集存』民国五年(1916年)の三十一葉オモテ右に元代パスパ文字官印の背刻部分の拓本と印文の印影が収められている(図参照)。当該書、巻頭の「目録」の記述によると、背刻には「管軍下千戸之印」「中書禮部造元貞元年□月□日」とあるという。背刻の拓本による限り「管軍下千・・・・」「中書□部・・・・造/元□□年□月□日」くらいしか読めない。印影は縦6.8cm×横6.8cm。印文は、左行より縦に読み、行は右に向かって進む。パスパ文字の篆書体で、下のようになり「管軍下千戸所印」となる。この読みは照那斯圖(1977)の印7及び照那斯圖・薛磊(2011)の§470にある。照那斯圖・薛磊(2011)は、本印は常熟博物館に現存するとし、文献の錢俊・関慧虞(1997)を紹介する。

- 1行目：gon【管】-geun【軍】
- 2行目：hī(a)【下】-c'en【千】
- 3行目：yu【戸】-šū【所】-yin【印】<sup>1</sup>

二

印文の下千戸所については『元史』卷九十一志第四十一上百官七にある。「上千戸所，管軍七百之上。達魯花赤一員，千戸一員，俱從四品，金牌；副千戸一員，正五品，金牌。中千戸所，管軍五百之上。達魯花赤一員，千戸一員，俱正五品，金牌；副千戸一員，從五品，金牌。下千戸所，管軍三百之上。達魯花赤一員，千戸一員，俱從五品，金牌；副千戸一員，正六品，銀牌。彈壓二員，蒙古、漢人參用。上千戸所從八品，中下二所正九從九品内銓注」(中華書局版、元史八、2311頁)。

<sup>1</sup> 下に示したパスパ文字のローマ字への翻字は吉池(2005)を修正したものである。ローマ字の右に付した見溪群疑などの漢字は漢語音韻学の伝統的な字母。【】内のf1,f2, š1,š2などの区別は漢語に特有な区別。数字1付した方は旧有声音に相当する。『蒙古字韻』以外の資料において、両者が区別されることは希である。そこで、区別が明瞭でない場合は、数字を付さずf、šなどと記す。ここに挙げたパスパ文字は碑文及び『蒙古字韻』に拠る典型的な楷書体。なお、印章や貨幣にはパスパ文字の篆書体が用いられる。篆書体は資料ごとに変化に富んでいる。規範化された形跡はなく、典型的な字形はないとするしかない。照那斯圖(1980)には篆書体の一覧表があり参考となる。

〈子音〉𑖀 g 見 𑖁 k' 溪 𑖂 k 群 𑖃 ŋ 疑 𑖄 d 端 𑖅 t' 透 𑖆 t 定 𑖇 n 泥 𑖈 l 来 𑖉 b 幫 𑖊 p' 滂 𑖋 p 並 𑖌 m 明 𑖍 f [𑖎 f1 奉 𑖏 f2 非敷。f1,f2の区別が明瞭でない場合はfとする。1は旧有声音、2は旧無声音。以下数字を用いるものは同様]、𑖐 v 微 E j 照知 𑖑 č' 穿徹 𑖒 č 床澄 𑖓 ŋ' 娘 𑖔 š [𑖕 š1 禪 𑖖 š2 審] 𑖗 ž 日 𑖘 j 精 𑖙 c' 清 𑖚 c 從 𑖛 s 心 𑖜 z 邪 𑖝 影 𑖞 h [𑖟 h1 匣 𑖠 h2 曉] 𑖡 γ 匣(合) 𑖢 y 𑖣 y1 喻 𑖤 y2 影(𑖥) 𑖦 喻(魚) 𑖧 r 𑖨 q 𑖩 h (visarga)

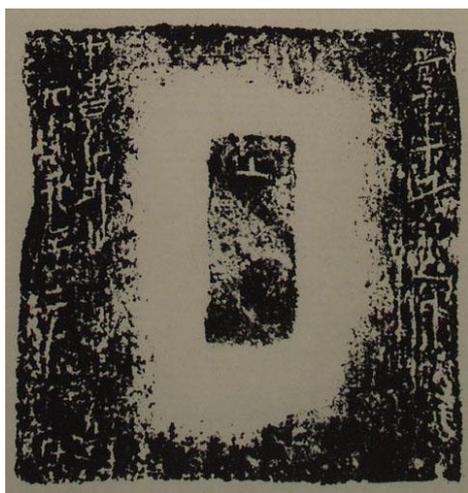
〈半母音〉𑖪 ü 𑖫 i

〈母音〉𑖬 u 𑖭 i 𑖮 e 𑖯 e 𑖰 o (母音aの専用字はなく、音節初頭の子音のみで表記される。ローマ字に翻字する場合、母音aは()を付して補写する。例えば、肝 gn→g(a)n)

三

漢語の音韻を表す匣母と曉母の区別であるが、『蒙古字韻』<sup>2</sup>は匣母𠬞 h1 と曉母𠬞 h2 として字形の上で区別する。『書史会要』<sup>3</sup>所収のパスパ文字の字母表でも字形は崩れているが両者を区別する。しかしながら、上記以外の資料で両者を明瞭に区別するものを知らない。さて、印文の“下”は匣母字であるから『蒙古字韻』に従うならば h1 と翻字すべきであるが、本官印に於いては両者の区別を確認し得ない。そこで、両者を区別するための数字は付さずに h で翻字する。次に、漢語の音韻を表す禪母𠬞 ś1 と審母𠬞 ś2 として字形の上で区別する。幾つかの碑文においても同様の区別がみられる<sup>4</sup>。『書史会要』所収のパスパ文字の字母表でも字形は崩れているが両者を区別する。しかしながら、上記以外の資料で両者を明瞭に区別するものは稀である。さて、印文の“所”は審母字であるから『蒙古字韻』に従うならば ś2 と翻字すべきであるが、本官印に於いては両者の区別を確認し得ない。そこで、上記の h と同様に両者を区別するための数字は付さずに ś で翻字する。最後に、漢語の音韻を表す喻母𠬞 y1 と影母𠬞 y2 として字形の上で区別する。『書史会要』所収のパスパ文字の字母表でも字形は崩れているが両者を区別する。しかしながら、上記以外の資料で両者を区別する確実な資料を知らない<sup>5</sup>。さて、印文の“印”は影母字であるから『蒙古字韻』に従うならば y2 と翻字すべきであるが、本官印に於いては両者の区別を確認し得ない。そこで、上記の h や ś と同様に両者を区別するための数字は付さずに y で翻字する。

『隋唐以来官印集存』所収の印章の印影による限り、次のパスパ文字には問題がある。2行目最後の n であるが、最終の筆画が縦長の長方形(□)でなければならないところ、字形が崩れている(下図の n 参照。黒の手書き部分は期待される字形)。3行目最後の yin の母音 i であるが、最終の線が長すぎて ü の篆書体のように横長の長方形(≡)になっている(下図の i 参照。黒の手書き部分は期待される字形)。

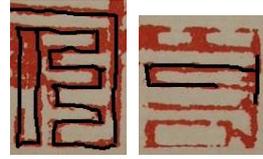


<sup>2</sup> パスパ文字で示された漢字音の下に同音の漢字を収めた韻書風の書物。大英図書館に、朱宗文の序(1308年)を付した写本が伝わる。

<sup>3</sup> 陶宗儀著。明初1376年成書。

<sup>4</sup> 「(定州)加封孔子制(三)」は両者を区別する。中村雅之(2014)の17頁および32頁参照。

<sup>5</sup> 吉池孝一(2015)に、確実ではないが、両者の区別の可能性を示唆する記述がみえる。



n

i

【参考文献（発行年順）】

羅振玉(1916)『隋唐以来官印集存』民国五年。

照那斯圖(1977)「元八思巴字篆書官印輯存」『文物資料叢刊 I』北京:文物出版社。

照那斯圖(1980)「八思巴字篆体字母研究」『中国語文』1980年第4期,307-309,269頁。

錢俊・関慧虞(1997)『常熟博物館藏印集』北京:人民美術出版社。

邱樹森(2002)『元史辞典』済南市:山東教育出版社。

吉池孝一(2005)「パスパ文字の字母表」『KOTONOHA』37号,9-10頁。

吉池孝一(2009)「『書史会要』八思巴字字母表—音注惡と梵文 visarga—」『KOTONOHA』84号,13-16頁。

照那斯圖・薛磊(2011)『元国書官印彙釋』(中国蒙古学文庫)瀋陽市:遼寧民族出版社。

中村雅之主編(2014)『パスパ字漢語資料集覽』(KOTONOHA 単刊 8)愛知県:古代文字資料館。

吉池孝一(2015)「八思巴字官印集積—『隋唐以来官印集存』の湖陽等處武勇義兵百戸印—」『KOTONOHA』151号,25-26頁。

\*本稿は平成 25 年・平成 27 年度科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号 25370488「遼金元清文字資料の研究—電子データ化を中心として—」の助成による成果の一部である。